
狙われた月影―百鬼妖譚―

柚木夏莉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狙われた月影——百鬼妖譚——

【Nコード】

N7717Y

【作者名】

柚木夏莉

【あらすじ】

弟の命を助けるため、湊は鬼の肝を探していた。

一方、鬼の氷上は、純血種の鬼としての大事な成人前の儀式を控えていたが——巡り合う筈のない種族二人が月光の下で出逢い始まる物語。

（他サイトでもシリーズ物で載せております。）

湊と氷上

暗く光をおとされた部屋の扉が、荒々しい足音に続いて突然開かれた。

響き渡るその木の音にも足を止めず、扉を開けた湊は^{みなと}学生服のままベッドに横たわる人物の側に駆け寄った。

目に映る姿はまるで霧でも浴びたように体中に汗の水滴が光っている。

「北斗……！」

その声に横たわっていた人物は薄く目を開いた。

「兄さん……」

そつと出した手はぞくりと冷たく、それを兄と呼ばれた湊はたまらないように握りしめた。

「死ぬな……！　しっかりしろ！　来月には移植に渡航するんだろ
う！？」

兄の必死な声に北斗は静かに笑んだ。

「その予定だったけど……もうもたないかもね。生まれた時からポンコツの心臓だったから」

その言葉に湊は目を歪ませた。

——まさか、ここまで悪くなっていたなんて……！

弟の心臓が悪いことは知っていたし、移植しか治療がないことも聞いていた。父も国内の移植では時間がかかりすぎると海外での手術を決意した矢先だったのだ。

——でも、こんなに急変するほど悪くなっていたなんて知らなかった……！

元々、弟とは母親が違っせいで普通の兄弟のように生活できなかった。

同じ広い屋敷に住みながら、東と西に別れて住んでいたのだ。

それでも、小さい頃から外にあまり出られない弟のたった一人の親友のつもりだった。

「しっかりしろ！　今すぐ僕が渡航先の病院に連絡するから！」

しかし弟は荒い息でゆっくりと笑った。

「無駄だよ。今すぐ渡航したって、体に合う提供者が見つかるまで待たないといけないのだから——」

間に合わない——そう笑う北斗の手を、湊はしっかりと掴んだ。

「諦めるな！　絶対に何をしたって助けてやるから！」

必死な兄の形相に、北斗は微かに苦笑したように微笑んだ。

「じゃあ、兄さん……お願いがあるんだ」

「何！？ 何でも言ってくれ！！」

自分を見つめる兄の眼差しに、北斗にふわりと笑みが汗の中に浮かんだ。

「あのね……鬼の肝が欲しいんだ。伝説ではそれを食べたら、どんな病も治せるらしい。それが——欲しいんだ」

ぎゅっと北斗は湊の指を掴んだ。

「京都の大江山に生き残りがいると言われている……ただの、伝説かもしれない……でもこのまま死ぬよりは、伝説でもいいから縋りたいんだよ」

——死は嫌だ。

そう伝えてくる指を握り返し、湊は弟を見つめた。

——このまま死なせるぐらいなら……

「わかった！ 絶対に鬼の肝を手に入れてくる！ だから絶対に生きろ」

百万分の一の無謀な賭けでもやってみよう——そう握る手で伝えると、湊は弟を頼むと側にいた看護師に頭を下げ、部屋を飛び出していったのである。

幽玄な月がその白い姿を雲間から現すにつれて、氷上はその美しい顔で溜め息をついた。

氷上の髪は月の光に、銀色に輝き、周りに真珠色の煌めきを投げかけている。肌は柔らかな透ける桜色で、唇だけがほのかに濃い紅を落としたように揺らめいていた。

伯父とよく似た金色の瞳が、鬼であることを表しているが、それは長い睫に憂鬱げに閉ざされた。

「お！ 氷上！ いよいよ明日はお前の契り固めの日だろ？ 何しけた面してんだよ」

勢いよく背中を叩いてくる星川を氷上はじろりと睨みあげた。

「憂鬱にもなるぜ。まったく……じい様共が雁首並べて何事かと思ったら、どうか明日の祝宴では、伯父の茨木を選んでくれなんて！ 何で俺がオジキに抱かれなれないといけないんだよ！？」

「ははっ、そういうことか！ まあ、いい加減長老方もやきもきしているからなあ」

憤る氷上をどうどうとあやすように、星川は氷上の小さな肩を叩いた。

「首領のオジキが独身で跡取りができないからって、俺に押しつけんな！」

「鬼は女の数が圧倒的に少ないからな——まあ、茨木の独身主義は

そのせいじゃないが」

笑いながら自分の背を叩く星川の逞しい姿を見上げ、氷上は悶絶した。

「よってたかつて、みんなして俺に女になれって言いやがって！俺は誰より強い男の鬼になりたいんだー！」

頭を抱えて叫ぶ氷上の、銀の髪の間から覗く小さな白銀の角を見つめて、星川は苦笑をこぼした。

——まあ、長老達の願いもわからんでもないけどな。

鬼は、その角が伸び始めたら、成人の準備を体が始める。

人の腹を借りて産まれた鬼の八割は生粋の男——そして純潔の鬼が子供から大人になる時、選ぶのも七割が男だ。圧倒的に女が少ない。

鬼は鬼同士で産まれた純血の鬼だけが両性で生まれ、成人するに従い性別を選べる。

角が伸び始めたら産まれた月の満月の夜に、契り固めの宴で、三年後の元服の日の添い臥しの相手を選ぶ。

添い臥しとは人間の世界でも古代には行われていたが、異性と一夜を共に過ごすことをいう。人間の世界では形骸化で単なる添い寝もあつたらしいが、鬼では違う。その夜、契り、精を交わすことによって、一人前の妖しとなるのだ。

おそらくそれは神に仕える者が一生純潔を維持しなければなら
ないのに対して、鬼は他人の精気を己の力として生きる妖しに属する
からだろう。

——けれども

星川は目の前の親友の妹の子供が、銀の髪を掻き回す様を面白そう
に見つめた。

——やっぱり男の方が強いから、みんな男になりたがるんだよなあ。
鬼にとっては強さは誇りである。なんでなよなよとした背格好を選
ぶ必要があるのかと、女性希望者は少ない。

——まあ、人から産まれる鬼に男が多いせいで、確かに男社会だよ
な……

きつと女の鬼になれば、誰より美しいだろうと惜しみながら、星
川は氷上の細い肩を叩いた。

「じいさん達の言うことを気にするな。お前はお前の好きな方を選
べばいい」

「星川……」

じーんと氷上は見つめた。

「ありがとう。もてないのに競争率高くなるのを応援してくれるな
んて……俺、お前を見直した」

「俺は軽くお前を蹴りたくなつた」

まったく星川は、黒い髪を揺らしながら、溜め息をついた。

「こう見えても、それなりにもてるんだぞ。その証拠に」

ふつと星川は笑った。

「天狗や妖狐、化け猫の知り合いに頼んで、明日一族の女の子に宴に参加してくれるように頼んでおいた」

「星川——」

「男になるなら、明日は女を選ばないとダメだろうが？ 鬼に女は少ないからな」

「星川！」

ぱつと子供が喜ぶように氷上は星川に抱きついた。

「バカ！ 恥ずかしいから離れろ！ だけど明日口づけした相手で契りを交わす契約が結ばれるからな。くれぐれも慎重に選べよ」

「うん！」

まだまだ子供っぽい素直さで返事をする氷上を、まるで弟のように星川は愛おしげに頭を撫でた。

満月が山の木々を青く照らし、深い黒い影を地上に横たわらせる

夜、微かに響いてくる笛の音に湊はにっと眼下に灯る明かりに笑みを浮かべた。

岩陰に立ち見下ろすと、下の少し開けた所に古い荒れ寺のような
のがあり、そこから楽しげな楽の音が響いてくる。

「ビンゴ」

小柄な姿で腕を組みながら、湊は明かりを見つめた。

「里の者に聞き回って、言い伝えを調べた甲斐があった。――まさか本当に満月の夜に鬼の酒盛りがあるとはな」

――ここらでは、満月の日に鬼が酒盛りの相手に娘を攫うと言われている、その日だけは女の子は山に入るなと言われましたなあ。

猫を抱きながら懐かしそうに話してくれた、麓の集落の老女の顔を思い出した。

――昔は山の荒れ寺で鬼の歌う声が聞こえたとか……満月の日に山に入るなんてくわばらくわばらと言いましたわ。

「ところで」

後ろからかけられた声に湊は記憶から引き戻され、振り向いた。

後ろでこほんと咳をしたのは、西紀にしきだった。

「本当にその姿で行くつもりですか？」

「当たり前だろう?」

母親を早くに亡くした自分の世話係をずっとしてくれていた穏やかな風貌の青年に、湊は少年らしくにつと笑った。

しかし着ている物は、撫子を描いた濃い紅色の浴衣である。

「神話の時代から、敵の懷に潜入して油断させるには、女装は常套手段！ 酒盛りの相手に娘を攫うほど女に飢えた奴らだ。みてろ、必ず見事誑かしてやる！」

「くれぐれも危ないことはしないでくださいよ」

決めたらひかない湊の性格を熟知した西紀は溜め息をつきながら、こぼした。

「大丈夫、必ずうまくおびき出すから、お前は鬼がきたら頼むよ」

そう愛らしい少女の姿で、湊はにつこりと笑った。

明るい月の光の中に太鼓の音が冴え渡る。

バチを持ちながら踊っている鬼達の側で、狸が頭に木の葉を乗せて楽しげに横笛を吹き鳴らしている。

澄んだ大氣に音が弾け、それに伴い楽しそうな笑い声があちこちから聞こえた。

「氷上ももうそんなに大きくなったんだなあー」

「この前生まれて、ぴいぴい泣いていたと思ったのに」

男の鬼達は既に顔を赤らめ、大きな朱色のさかずきに注いだ酒を笑いながら飲み干している。

荒れ寺の縁側に座り、小さなさかずきで酒を飲んでいる氷上の隣には、首領茨木とその妹である氷上の母鬼が座り、その氷のような絶世の美貌に鬼達は見惚れていた。

ほかに女の鬼も幾人が集まり、座を盛り上げるのに神楽を踊ってくれていたが、どうにも氷上の表情は浮かない。

——みんな人妻じゃないか！

考えてみれば、絶対的に少ないのだから、女鬼にはもう決まった相手がいて当然だった。

自分の伴侶が指名されたりしないようにと、眼光鋭く睨んでくるその夫の前で、いくら首領の血族でも添い臥しの相手を選ぶわけにもいかない。

——それにみんなすぐく年上だ……

がつくりと氷上は肩を落とした。

そんな氷上の前に突然妖艶な美女が現れた。

「浮かぬ顔をしておるな。わらわを選んだら、一夜で男としての楽

しみの絶頂を極めさせてやろうに」

九尾を鮮やかに金色に揺らしながら顎に手をやる妖狐の嫣然とした笑みに、氷上は思わず腰が逃げた。

「ん？ どうじゃ、帝さえとろかす妖狐の蜜の味を知りとうはないか？」

しかし氷上が言葉を発するより先に、横から薙刀が二人の顔の間に差し込まれた。

「黙れ、淫乱狐」

氷上がその声の方に目をやると、墨色の衣を修験者の如く着こなした伶俐な面差しの女性がいた。美しいが、鼻がひどく高く見えるのは気のせいではない。

「お前などに鬼の首領の甥を任せられるか。氷上、私達天狗一族の女性を選ぶなら、お前に我らの山でみっちり修行を積ませてやる」

——どっちも御免だ！

思わず氷上は心の中で叫んだ。

——俺にだって、理想ぐらいある！ 初めてなんだから、同じ年ぐらいで、俺より小さくて……

「妖怪はほとんどが百歳以上だよ。その中でも私らは若いうちだよ」

「見た目だけな！」

まるで考えを読んだかのように今風の女子大生ぐらいの姿ですりよつてきた化け猫の女の子を氷上は思わず腕で防いだ。

「見た目若かったら、いいでしょう？」

「最低五十歳以上揃いが何を言う！」

——見た目若くても、中身は喰わせ者揃いじゃないか！

「若い方じゃん！」

きやはははと笑う化け猫の女の子達がゴロゴロと転がるのを見ながら、氷上は頭を抱えた。

——もつとほかにいないのか……こう、小さくて守ってやりたくないような可憐な……

そうふと目を上げた時、その姿が氷上の目に映った。

——いた。

響く太鼓の音の向こうに、紅い浴衣に撫子の花を美しく描いた、大きな瞳の少女が目に入る。短い黒い髪を花の髪留めで飾り境内の端で不安そうに立っている。

元々小柄なのだろうが、筋骨逞しい鬼達の間では、その姿はひどく細く頼りなく見えた。背はおそらく氷上の肩ぐらいだろう。

初めてみるその子は愛らしい風貌で、ただじつと氷上を見つめていた。

「おい、お前——」

氷上が声をかけようとした時、急にそれに気づいた星川が声を張り上げた。

「おい！ 人間の娘は連れてくるなど言っただらうが！」

それに側にいた小鬼が頭を下げた。

「すみません。山の中で道に迷ったと、さっき境内に入ってきたんです。すぐに追ひ払いますので——」

「迷ったのなら仕方ないよな」

上機嫌で氷上はよつと腰を上げた。

「こんな暗い中歩かせて、崖から落ちたりでもしたら大変だ。明日の朝、俺が里まで送っていつてやる」

「おい、氷上——人間はダメだぞ」

慌てたように言う星川の言葉も聞かず、氷上はもっと顔を見ようと近寄ろうとした。

その時、一人の男の鬼が近づいてきた。

「氷上——俺を選ばないか？　一生贅沢させてやるぜ」

お前、綺麗だもんなと笑う男の腹に氷上は咄嗟に拳を入れた。

「俺より弱い鬼に興味はない」

大人の鬼を一撃で悶絶させた、まだ小さな角を持つ鬼を見つめて
湊は思わず心で呟いた。

——なんか、むかつく。

月の光に髪は冴え冴えと眩く輝き、瞳はまるで金色の水晶だ。百合のように凜と夜の中に浮かび上がる姿は、人でない身であっても目を奪われる程に美しく、鬼なのに神々しくさえも見える。

——僕なんて、背が低くて女顔だからさんざんからかわれてきたのに……

同じくらいの年格好なのに、世の中にはこんなにも美しくてカッコいい男がいるのかと思うと無性に腹がたった。

——こいつに決めた。

湊は静かに微笑んだ。

——こいつの肝なら、確かに神通力がありそうだ……

産まれた時からろくにベットから出られない弟、身体測定の度にチビとからかわれ身長順で一番前に並ばされた自分——神様はなんて不公平なんだろうと思う。

——お前に決めた……

そんな湊の微笑など気づかずに、氷上は怖がらせないようにえーっと考えながら、その少女の姿の前に立った。

「あー、腹へってないか？」

山で迷ったのなら、お腹がすいてるかもと考えながら出した言葉に、湊は一瞬キョトンとした。

「なんか食うか？ 鹿や猪肉とか、木の実ならあるが……」

——酒はまずいよな。

そう頭を捻りながら言葉を出す氷上に、一瞬呆氣にとられたが、すぐに湊は怯えたふりをした。

「おなかは……すいていません。それよりも、怖くて……」

そう言って肩を震わせる少女に、氷上は周りが妖怪だらけなのに気がついた。

「あー……、じゃあちょっと休めるところに送ってくるわ」

——ここじゃあ、星川が邪魔しそうだしな。

二人きりになって、なんとか添い臥しの役を引き受けてくれないか頼んでみようと氷上は考えた。

——やっぱり初めて抱くなら、こんな可愛い子がいいよな……

この少女なら、三年後でもきつと可愛いだろうと氷上は目を細めた。

「すみません……」

そう言う少女の肩を怖がらせないように抱くと、そつとみんなから守るように宴の場から離れた。

青白い月の光が木の梢から降り注ぐ山道を氷上と湊は連れだって歩いた。

——さあ、どう切り出したもんな……

月の光のせい、緊張のせい、どこか青く強張って見える少女の顔を下に見ながら、氷上は夏の虫の音がする山道を歩いた。

——いきなり三年後、抱かせて下さいはないよな……

それは変質者だと氷上が自答していると、隣の少女が俯きながら小さな声をこぼした。

「本当にすみません、私のせいで、宴を楽しんでいたのに……」

「なんだ、そんなことを気にしていたのか」

明るく氷上は笑った。

「そんなの気にしなくてもいいんだぜ？」

「優しいんですね」

にこりと湊は笑った。

——本当に優しい鬼……

「では、それに甘えて一つお願いしたいことがあるんですが……」

「お、いいぜ」

——そうだ！

閃いた考えに氷上はパツと顔を輝かせた。

「じゃあ、実は俺も頼みたいことがあるんだ。俺の願いを聞いてくれたら、何でもお前の願いを叶えてやる」

「本当ですね？」

「ああ、約束だ！」

すると湊はまるで暗闇に怯えて縋るように、氷上の肩に抱きついた。

「私の願いを叶えてくれるなら、何でも言うてください」

両手で湊は氷上の背中に甘えるように手を伸ばした。

そして袂に隠し持っていた短い刀を引き抜くと、すっと氷上の背中めがけて狙いを定めた。

「俺の願いは――」

どう言おうか悩んでいる氷上の美しい顔を見上げながら、湊は刀を握る手に力をこめた。

――僕の願いは、お前の命だ！

ぎらりと刀に月の光が鈍く輝いた。

湊と氷上（後書き）

こちらでは初めての投稿です。

どうかよろしく願いいたします。

感想など聞かせていただけますと、嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7717y/>

狙われた月影―百鬼妖譚―

2011年11月23日00時50分発行